

2009年度春季大会シンポジウム
「地球温暖化に関する科学的根拠の解明と脆弱性評価
のさらなる連携に向けて」の報告

はじめに

林 陽 生*・井 上 知 栄**

2008年に京都議定書の第一約束期間がスタートし、地球温暖化の負の影響を緩和することが強く意識される時代になった。これまでに、気象要素の将来予測、さまざまな分野への影響評価と影響緩和策の検討、温室効果ガス濃度安定化レベルの検討と削減技術の開発などの研究が行われるなかで、共通の問題として、不確実性の導入と予測精度の向上が重要になってきた。

本シンポジウムではこうした動向を背景とし、「予測」と「評価」のさらなる連携をテーマに取り上げた。最近では、地球温暖化に関する文部科学省や環境省などの大規模プロジェクト研究が実施されて新しい知見が得られつつある。そこで、空間的に詳細な気候

シナリオの特徴とそれらを影響評価へ活用する際における可能性、および自然生態系や人間生活の基盤などへの影響評価に不可欠なモデル予測値の代表性の考え方などを明らかにする視点に立ち、これらの分野を代表する4名の専門家から話題提供を頂いて総合討論を行った。

(編集委員会より：以下の記述内容は原則としてシンポジウム当時のものであり、文中の「現在」等の記述もシンポジウム時点を指します。

諸般の事情により、掲載が遅れてしまいましたこと、ここに心よりお詫び申し上げます。)

Further Coordination between Understanding of the Scientific Basis and
Vulnerability Assessment on Global Warming
(A Report on the Symposium of the 2009 Spring Assembly of
the Meteorological Society of Japan)

Yousay HAYASHI* and Tomoshige INOUE**

* 筑波大学生命環境系。

** 筑波大学生命環境系 (現 海洋研究開発機構地球環境変動領域). tomoshige@jamstec.go.jp

—2009年9月2日受領—

—2012年6月28日受理—

* *Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba.*

** (*Corresponding author*) *Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba (Present affiliation: Research Institute for Global Change, Japan Agency for Marine–Earth Science and Technology. E-mail: tomoshige@jamstec.go.jp).*

(Received 2 September 2009; Accepted 28 June 2012)

Contents

1. Nobuo MIMURA: Recent Studies on Climate Change Impacts and Dangerous Level of Global Warming.
 2. Nobuyuki TANAKA, Tetsuya MATSUI, Ikutaro TSUYAMA and Yuji KOMINAMI: Assessing Climatic Factors Controlling Plant Species Distribution and Predicting Habitat Shifts Following Climate Change.
 3. Shoji KUSUNOKI: How to Use Output from Climate Models?
 4. Yukari N. TAKAYABU: How Can We Interpret the Global Warming Climate Projection? —An Approach from Multi-climate Model Intercomparisons—.
-